

## [12] 食を通した「干潟ベントスの認知度向上」CEPA 活動

佐々木 美貴（日本国際湿地保全連合(WIJ)）

中川 雅博（日本国際湿地保全連合(WIJ)）

### 1. 活動の経緯

環境保全に役立つ基礎資料を集め、保全の気運を高めるには、市民参加型調査が効果的である。しかし、調査の担い手不足の問題が深刻である。とりわけ、干潟に生息する生物（ベントス）は、多くの分類群からなるため、担い手不足解消は、長らく解決困難な課題であった。

私たちは、原因分析の結果、フィールドで使いやすい図鑑がないことと、調査をまとめるリーダー役の研修機会がないこと、の2点を克服すれば、干潟での市民参加型調査を普及させられると考えた。

そして、2008年度から本格的に、複数の個別目標を掲げたプロジェクトを実施した。まず、経団連自然保護基金の支援で干潟市民調査手法を考案し、その継続的な協力でポケット版図鑑シリーズを製作した。つぎに、日本財団と協働で研修会を開催し、調査リーダーを育成し、富士フィルムグリーンファンドからの資金で、若きリーダーが主軸となった八代海ベントス相調査を実施した。製作した図鑑シリーズは、環境省エコポイント制度を活用して『干潟ベントスフィールド図鑑』としてまとめ、2014年9月時点で1000部以上が売れるベストセラーとなっている。

「干潟調査者を絶滅危惧種にするな！」を合言葉に、有識者らとタッグを組んだ取組は、2012年に日本湿地学会優秀発表賞受賞、日本ベントス学会自由集会開催など、一定の成果を収めたと言える。

### 2. 新たな活動

目下の問題は、いまだに、干潟ベントスそのものは、絶滅の危機から脱していないことである。それは、干潟域に十分な関心が払われないままに、開発などにより、ベントス個体群が急減するためである。そこで、ベントスの認知度が低い原因を考えたところ、(1)人々が関心をもつ情報が分散していることと、(2)関心をもつ層が限られていて、すそ野が広がっていないこと、の2点に気がついた。そこで、干潟ベントスの認知度を上げることを目的に、2014年から「情報データベースの構築」と「食を通したすそ野の拡大」に取り組むことにした。

### 3. 取組内容と結果速報

演者らは、まず、「干潟ベントス・データベース」で、食材としての利用状況、絶滅の危険性、外来種の情報などを整理した。対象としたベントス種は、前述のフィールド図鑑に掲載された全500種（比較種8種を含む）である。その結果、20%にあたる80種で、何らかの食材利用がなされていることがわかった。具体的には、シオマネキ *Uca arcuata* やアリアケガニ *Cleistostoma dilatatum* は、九州の一部の地域で「がん漬け」という塩辛にされ利用されていた。また、ミドリシャミセンガイは、岡山県の児島湾周辺などで利用され、有明海沿岸ではメカジヤ（女冠者）と称されて煮つけにされていた。もちろん、ハマグリ *Meretrix lusoria* は、汁物吸い物や酒蒸し、焼きはまぐり、佃煮、土瓶蒸し、串焼き、寿司など、幅広い料理で利用されている。そして、これらの種に共通することは、いずれも、絶滅の危険性が高まっていて、レッドリストに掲載されていることである。

食材利用されている種には、外来種も含まれている。例えば、洋食食材となるヨーロッパ原産のムラサキガイ *Mytilus galloprovincialis* は「ムール貝」として、クラムチャウダーに加工されるアメリカ原産のホンビノスガイ *Mercenaria mercenaria* は「大あさり」や「白はまぐり」として流通している。

今後は、これらの食材利用等の情報を、干潟ベントスの重要性を啓蒙する CEPA 活動に、いかにつなげ、いかに「すそ野の拡大」を達成するかが、本取組の主要な課題となる。